

天忠(誅)組ノ変 百六十年

幕末大和争乱

岡本彰夫

「近世奈良を語る会」「近世・近代の思想研究会」合同研究会より
会場：奈良県立大学 時：2019年7月12日

1. なぜ今天忠組なのか

(1) 利他／責任／再生

本日は、「天忠(誅)組ノ変 百六十年—幕末大和争乱」という厳めしいテーマを掲げておりますが、難しい学術研究発表ではございません。また「天忠組の変」そのもの「ズバリ」というものでもなく、事件の契機となった「大和行幸」のそのまた契機、書記方として天忠組に加わった歌人・伴林光平のこと、その他周縁の話題をいくつか提供させていただきたいと思っております。尚、書記方を務めた伴林光平が忠の字を用いているので天忠組と書かせてもらいます。

最初に「なぜ今天忠組なのか」と項目を立てていますが、それ以前の問題として、そもそも「天忠組」そのものが——同じ幕末期の「新撰組」とは違って——有名な存在ではありません。たまに名前が出てくるときも、たい

主権者の方も「及び腰」でした。確かに、それには理由もあって、行為の一部——五條代官の殺害など——を取り上げれば、明らかな「暴挙」です。高らかに天忠組を称揚するには気が引ける。その意味では、「新撰組」も同じような暴力沙汰を繰り返したと思うのですが、ともあれ、そのような天忠組を取り上げる、今日的な意味があるか。単なる心情的な個人の思い入れではなく、私は、3点ほど指摘できると考えています。

第一に「利他」の行為であったということ。20歳代の若い人が、その行為の是非はさておき、自分(自分たち)のためにではなく、「世のため・人のため」に自らの命を捧げた。しかも、これを自発的に行ったということ。その意味は、あらためて考え直す価値があるように思います。

第二に「責任の所在」の問題です。天忠組では、責任を持つべき人は、例外なく自らを処して自害した。いや、自害を褒めるつもりはありません。天忠組全体の行為について、責任の所在が明確で自らで引責したところに意味があると考えているのです。

第三に「再生」。これは先の2点に関わっています。自らの意思で「世のため・人のため」に挺身し、最後にその責任を自ら負った人たちがいた。後世に生きる我々には、そのような人たちの名を歴史にとどめる義務があるのではないかと、そうして幾つかの教訓を学ぶべきではないかと、そう考えております。

このような心がけて天忠組に関わっておりますが、私は学者や研究者ではないので、本日の内容もいわば「天忠組サイドストーリー」ないしエピソードのようなものとお考えください。天忠組に関する研究の白眉は、久保田辰彦

ていは「天誅組」——「忠」でなく「誅」——と記される。「天誅を下すぞ」という、上からの暴力的なイメージが濃厚です。いかにもフレッシュな響きの「新撰組」は、子母沢寛や池波正太郎をはじめとするたくさん小説で取り上げられ、映画やテレビでドラマ化された作品も枚挙に暇がない。沖田総司などは、まさにアイドル扱いです。それに引き換え、我が「天忠組」の方は、私の知る限りこれまで一度もドラマになっていない。(かつて映画が一本あったようですが)

全国的知名度を嘆く前に、地元・奈良県の人でも「天忠組」を知る人は少ない。従来から、五條市・東吉野村・安堵町・十津川村といったゆかりのある市町村が啓発活動をしてこられました。残念ながら単発的で規模が小さく、訴求力に限界があった。

そこで、奈良県の協力も求めながら、このゆかりある4市町村に呼びかけて、東京で天忠組のシンポジウムをするように働きかけました。やっと最近になって、軌道に乗ってきた手応えを感じるようになりましたが、当初は

先生の『いはゆる天忠組の大和義拳の研究』(昭和6年、大阪毎日新聞社)です。昭和の初期、まだ天忠組の関係者や一つの世代がいた時期に、吉野を限らず、この書を超えるものはないように思います。本書が高いレベルで全てを網羅したために、逆に、その後長く研究が停滞してしまっただけです。しかし、近年になって東吉野村の阪本基義先生が『草莽の記—天誅組始末—』(平成21年、奈良県・東吉野村)と『天誅組さきがけの道』(平成25年、東吉野村天誅組150年顕彰記念事業実行委員会)の2冊の本を著された。阪本先生は長らく東吉野村の中学校の校長を務められ、その後村の教育長に就かれていました。天忠組の生き字引のような方で、何を訊ねても即座に答えが返ってきます。後者の『天忠組さきがけの道』は、中学の郷土学習の副読本となったもので、たいへんわかりやすく要領よくまとめられています。

天忠組のメインストーリーについてはこの2書にお任せして、私の方は天忠組に関心を抱くに至った、個人的な経緯からお話ししたいと思います。

2. 富田光美と社伝神楽

私が天忠組に関心を持ったのは、幕末、春日大社の社家であった富田光美という人物との関わりです。この富田と和歌でつながっていたのが歌人・伴林光平で、伴林は天忠組の書記方であった。

春日大社には、高級神職である16軒の社家と、その下に80軒くらいの「神人」と称される下級神職家——これは禰宜と自称する——があり、前者は3年ごとに位階が上がる仕組みになっていて、地下ながら長命ならば従二位まで

のぼる家柄でした。富田光美は社家しゃけでありました。一級の文化人で、文筆や芸能に長けていて、幕末の復古大和絵画家である冷泉為恭れいぜいためかみや古川躬行ふるかわみゆき（註1）とも交流があり、冷泉為恭からは絵を習っていたようです。古川との付き合いは親密で、古川が著した『神事略』（明治3年）には、春日大社独特の御幣の折り方等が図解で載せられ、また春日の「社独特の故実も記されています。古川躬行は、津和野藩主で『古事記神代系図』などを著した福羽美静ふくはみしずとも幕末から交流があり、また皇室祭祀を司っていた白川伯王家の学頭を務めた優秀な国学者で、太政官とも非常に近い関係にあった。おそらく、その古川の推挙があったのででしょう、芸能に長けた富田は太政官の命により、全国の神社に「神代俳優」（かみよのわざおぎ）を教えに回ったのです。

明治初年に神仏判然令が出されると、それまで寺であったものの中に神社に代わった所もある。例えば金刀比羅宮ことひらくわ（こんびらさん、香川県仲多度郡琴平町）もそうだし、出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）も神社になった。こういう神社では神楽を含め、神事が何もわからない。そこに古川は春日（大社）の神楽を推挙したのです。これには、本居宣長の『玉勝間たまかつま』という伏線がありました。宣長は春日（大社）の古い神楽歌を紹介して、国風の古調の神楽歌であると賞賛し、推奨した。国学者の間で春日の神楽歌は一目置かれていた存在で、富田光美はこれに精通していたのです。富田が全国を巡るのは慶応四年（1868）あたりからですが、最初に訪れた神社が先に触れた金刀比羅宮なのです。

さて、ここから私自身が関わる話になります。20数年も前のことです。もともと春日大社には「社伝神楽」という巫女舞が伝わっていたのですが、昭和の初年に手が変えられた。

神社によっては、その「事実」を認めないところもありましたが、相当有名な神社でも富田から春日の神楽を伝習していたことは、一部売却された富田家文書——私の手元にあります——中の「授伝誓書じゅでんせいしょ」からも明らかです。各地で大切にされ、評価もされた富田光美ですが、気の毒なことに春日大社ではほとんど忘れ去られた存在です。光美は素行にやや問題があり、不始末が重なって免職となり、700年続いた社家の名跡も消える事態となる。ほどなく家名は復活しますが、光美個人の汚名が挽回されたわけではない。春日社伝来の神楽を教えに歩いて、飯を食っていたという感覚でも見られ、全国的な富田の功績が逆に社内での不評判の原因ともなっていたようです。富田自身もそのあたりはわかまえていたようで、大切なものは奈良には遺っていない。金刀比羅宮や出羽三山など大切にしてくれたところに渡していたようです。

【註1】 1810・1883。みつらともいう。江戸後期〜明治時代の国学者、神職。維新後、枚岡神社や大神神社などの大宮司を歴任。著作に『散記』『喪儀略』など。

【註2】 1883・1956。明治〜昭和期の雅楽師 宮内省式部職業部楽長。

【註3】 ？・1886。平安時代前期の雅楽家。今日まで宮中につたわる神楽の形式をさだめ、神楽と右舞の祖とされる。

3. 天忠組ノ変の背景

(1) 維新の先駆け

さて、私はそのような富田光美という春日社の社家を入口にして、天忠組に入っていたのですが、次の段階の伴林に進む前に、まず「天忠組の変」

当時宮内省楽部の多忠朝おのただとむ（註2）が、春日の巫女舞を「古式に戻す」ということをした。多忠朝は、太安万侶の子孫と言われる「多（おおの）」家の出身です。多家は、平安前期の多自然麻呂おのじねんまろ（註3）の後に2家に分かれ、一方は多坐弥志理都比古神社みしりつひこじんじや（奈良県磯城郡田原本町多）の社家となり、他方は京都に移って楽人の家になった。多忠朝は、後者から出た人で、現在全国の神社で行われている「浦安の舞」や「豊栄舞とよさかま」を作った。どちらも舞楽由来の男振りの舞です。その多忠朝がどれだけ手を入れたのが長らく疑問であり、それ以前の神楽の姿を調査するため、改変以前に伝授された春日の神楽舞から比較検討しようと思いい立ち、富田光美が明治初年に教えに回った神社、すなわち金刀比羅宮や出羽三山、住吉大社（大阪市住吉区）を含め、全国各地の神社を調査したのです。その調査で面白いことが浮かび上がった。それは富田光美が連綿と春日に遺っていた神楽を、そのままではなく——舞の流れは一定ですが——神社ごとに必ず手を替えて教えていたということです。「同じ神楽では、春日の神さまに申し訳ない」という意識があったのでしょうね。金比羅さんには金比羅さん独特の手に替え、住吉さんは住吉さんの手の替え方が施してあった。

春日では、戦中神楽の指導をしていた旧神人家の出身である榎原秀子が急死、加えて戦後の混乱でたくさん神楽が消えてしまった。この調査では、数曲の廃絶曲と舞を復興することができました。

金刀比羅宮では、富田先生お住まいの跡という竹藪に案内された。出羽三山では、富田の写真が神棚に祀られていた。集合写真でしたが、富田大和守光美は神格視されていたとも言えます。

全国の神社への「神代俳優かみよのわざおぎ」の教授、これが富田光美の最大の功績で、の背景——前史——に、簡単に触れておきたいと思っています。そもその事の起こりは、幕府の失政です。嘉永6年（1853）に来航したペリーの黒船に開国を迫られると、老中・阿部正弘あべまさひろは判断に迷い、朝廷・親藩・外様の意見を聞いてしまった。これで幕府に当事者能力のないことが、有力外様大名にまで知れ渡り、幕政に関与する口実を与えてしまった。翌年ペリーが再航すると日米和親条約を結び、英国とロシアとも同様の条約が結ばれる。内容は、鯨漁船などへの薪水・食料の提供と総領事の配置でした。和親条約の次は通商条約となって、次の老中・堀田正睦ほったまさよしが孝明天皇に勅許の伺いを立てたものの、孝明天皇はいわゆる攘夷派ざいぎですから、お許しにならない。時を同じくして、幕府内では將軍継嗣問題が起ころ。紀州の徳川慶福とくがわよしみを推す南紀派と、一橋慶喜を推す一橋派が真っ向から対立する。内外に問題を抱えたまま安政5年（1858）、大老となった井伊直弼は勅許を待たず日米修好通商条約を締結。南紀の慶福を推して、第14代將軍・家茂が誕生する。このような井伊直弼の専横に一橋派・尾張徳川・福井の松平慶永まつだいらけいながが憤るが、逆に隠居謹慎処分となってしまう。井伊の諸策への反発者には世に「安政の大獄」といわれる弾圧が加えられた。

一層の反幕が激化する中、万延元年（1860）3月3日、井伊直弼は登城途上の桜田門外で、水戸と薩摩の浪士によって首を刎ねられる（「桜田門外の変」）。まさに幕府の権威は地に墜ち、次いで老中となった安藤信正あんどうのぶまさ・久世広周ひろちからは、穏当な公武一和案を唱え、家茂と孝明天皇の妹の和宮親子内親王の婚儀となるものの、それでも火種は収まらない。外国との貿易による物価の高騰があり、かつ孝明天皇が相変わらず異国人をお嫌いということもあり、公武合体派を押しつけるように尊王攘夷派が台頭してくる。長州は尊王攘夷

派で、朝廷と親密な関係。薩摩は島津久光が幕政改革派。土佐は基本的に親幕の立場ですが、下級武士が言うことを聞かず脱藩して国事に奔走する。その状況の中、文久2年(1862)、寺田屋事件が勃発します。尊皇攘夷の過激派が、島津家の藩兵を抱き込んで京都に火をつけ、孝明天皇を拉致して尊王攘夷を進めようと計画を練っていた。それが寸前に発覚し、寺田屋に集まっている激派の志士が薩摩藩により襲われた。その志士の中に、土佐の吉村虎太郎が含まれていました。彼等がやがて天忠組の中心人物になっていく、こういう流れができあがっていったわけです。

さて、孝明天皇が文久3年(1863)に「大和行幸」を仰せ出されたことが、天忠組の直接的な契機となりますが、それに先だって天皇は賀茂と石清水にも行幸されました。この行幸では随行した將軍に太刀を与え、天皇の目の前で攘夷を誓わせるとの企てがあつたのですが不首尾に終わり、ついに「大和行幸」となるわけです。

(2) 「大和行幸」の理由

天忠組については多くの先行研究がありますが、「大和行幸」が詔された理由については、踏み込んだ検証がなされていません。毛利家の動きや真木和泉^{註1}の動向が指摘されたりしますが、それだけで天皇が動かれるはずがない。より重大な理由がなければならぬ。

「大和行幸」については、『孝明天皇紀』(宮内庁蔵版)は文久3年(1863)8月13日の条で「車駕將に神武天皇山陵及び春日社に幸して攘夷を禱り、親征の事宜を議せんとす。是日之を内外に公布」されたと記述されています。

書かれているのです。

こう気持ち良く、あちこちで話をしておりましたところ、石上神宮の元神主の白井伊佐牟さんから「間違い」を指摘された。白井さんによると『多武峰略記』は2種類あつて、1つは「永濟本」という建久8年(1197)に上法院永濟が撰じたもの。もう1つが「静胤本」で、これも建久8年(1197)に前検校の静胤の撰と仮託されたものですが、実はずっと後の寛文8年(1668)の大織冠・鎌足公(藤原鎌足)の1000年忌に、前者「永濟本」を改めて作つたもので、偽書である。先に引用した国源寺の由緒は、「永濟本」には記載されておらず、偽書「静胤本」にしか書かれていない、と。

そうになると、先に引用した「人皇第一の国主」の話を鎌倉初期にまで遡るのは難しくなる。これは困ったことになったと思つていたら、またしても白井さんが、今度は助け船を出してくれた。「永濟本」に記載がないからといって、国源寺自体がないわけではない。嘉吉元年(1441)の『興福寺官務牒疎』に国源寺の存在が確認できる。国源寺の由緒を引用した「静胤本」には「旧記に云う」と書かれており、『興福寺官務牒疎』以前にも、何らかの縁起本があつた可能性はある。したがつて、平安末から鎌倉初期にまで遡るのは難しいかもしれないが、嘉吉元年(1441)を下限として国源寺が存在し、神武天皇の菩提を弔う寺として機能していたのだろう、というのが白井さんのアシストで得た現段階での考え方です。

さて近世・江戸時代に入ると、京の儒者で医者^{註2}の松下見林^{註3}は皇陵調査により、神武陵は高市郡の慈明寺村に存在する「神武田」としました。『前王廟領記』、元禄9年(1696)。貝原益軒^{註3}も同所を推しましたが、

「攘夷」と「親征」の語が目を惹きますが、留意したいのは、神武天皇御陵の参拝と春日社に行かれるというところ。なぜ、この2カ所に赴かれようとしたのか。

① 神武陵の修陵

神武天皇の御陵は、長らく所在不明になっておりました。『古事記』では「御陵は畝傍山之北方、白禰尾上に在り」、『日本書紀』では「畝傍山、東北に葬しまつる」と記されている。『延喜式』の諸陵寮式には「兆域東西一町、南北二町、守戸五烟」と書かれ、平安時代には御陵の場所が確定して、そのサイズまで記載されている。また『日本書紀』の天武紀には、壬申の乱に当つて神がかりが起りまして、神武天皇の御陵に馬及び種々の兵器を奉つて祈願をしたという記録があり、この頃は神武天皇御陵の場所が特定されていて、信仰の対象になっていたことがわかります。我々大和の人間としては、『延喜式』以降、江戸時代まで神武天皇の御陵の所在がわからなかったのかと暗澹たる気分になります。救いは談山神社の由緒を記した『多武峰略記』です。これに「旧記に云う。国源寺。寺は高市郡畝傍山の東北に在り。天延2年(974)3月11日早朝。檢校泰善彼の地を過ぐ。途中に人有り。頭に白髪を戴き身に茅蓑を着す。泰善に告げて曰わく。師、此地に於いて国家栄福の爲に一乗を講ぜよと。泰善問いて云う。公の姓名亦住処やいかんと。答へて曰わく。我は是れ人皇第一の国主也。常に此処に住まう。言訖るや見えぬ。故に泰善毎年3月11日彼の地に到り法華を講ず。」と書かれています。これは、貞元2年(977)に国主になりました藤原国光が一丈四方の堂を建て、観音像を安置して末寺としたという、国源寺由緒の箇所です。ここに「人皇第一の国主」すなわち神武天皇が「常に此処に住まう」と

元禄11年(1698)の江戸幕府皇陵探索では同郡塚根山(現・綏靖天皇陵)を神武天皇陵とし、ここに竹垣を巡らした。以後も諸々の異説が出ましたが、大和芝村藩士竹口尚重(栄斎)が『陵墓志』で畝傍山北方にある洞村の丸山(御殿山)を主張してからは、この説に従う人が多くなりました。幕末に川路聖謨が奈良奉行に就任し、嘉永2年(1849)『神武御陵考』を著して、再び慈明寺の神武田の小丘を御陵として以降、神武田が有力説となった。『山陵考』を著した国学者である谷森善臣(種松(種万都・種案とも)へ改名)の事細かな研究による『谷森種案手録』では、「ミサンザイ」と「神武田」を根拠とし、現在の神武天皇陵とまた綏靖天皇陵をも上げられています。その上で最終的に現神武天皇陵を「ミサンザイ」に治定されたのが、孝明天皇でした。その後宇都宮藩主の戸田大和守が修復・修理にあたり、ほぼ完成しつつあつたのが、ちょうど「大和行幸」の文久3年(1863)のころでした。「大和行幸」における「神武天皇山陵に幸」されるのは、このような状況が理由であつたと思われれます。

② 春日大社での「恠異」

では、もう一つの「春日社」への行幸の理由は何か。これには「恠異」が関わっています。「恠異」とは、神の御心・お怒りに触れる行為による異変を指します。大和には、3つの大きな「恠異」があります。

1つは多武峰の「御破裂」。これは御神像(鎌足公の木像)が破裂し併せて御破裂山が鳴動することを言います。御破裂が起こると辻占をし、御破裂山(御陵山)の三方にある立聞き^{たたみき}の芝^はで、音の出た方向を確認する。この方向によって「恠異」の原因が定まり、朝廷から派遣された「告文使」が祝詞を

あげて何度もご祈禱する。すると不思議にも木像の割れが修まる。この「御破裂」は、慶長年間を最後に、これまで起こっていません。

第2と第3の「恠異」は、いずれも春日大社で起こります。1つは「山木枯槁」。これは、春日山の木が一齐に枯れ始めるという「恠異」で、これまで13回記録されています。

もう1つの恠異が「神鏡落御」です。元来春日大社の本殿は、大宮四殿と若宮一殿の計五殿あつて、各殿に6枚の御鏡が架かっています。これを「六面神鏡」と言い、その御鏡の紐が切れて落ちるのが「神鏡落御」です。春日（大社）でこの2つの「恠異」が起こると、国家・国民に大きな災害が降りかかるとされています。

さて、春日大社には「御神楽」御差遣の制度がありますが、これは天皇の命を以て差し遣わされる。一座で7時間ほどかかります。当初は春秋の二季に天皇が差遣され、後に「四季御神楽」すなわち春夏秋冬の4回となりました。これは「めでたごと」の御神楽で、恒例御神楽と呼ばれましたが、朝廷御衰微に伴って断絶します。これは一夜を限りとします。

一方、山木枯槁と神鏡落御の「恠異」のときには「臨時御神楽」をします。これはとんでもない「わざわいごと」なので、朝廷がどれほど御衰微になっても、必ず御神楽の御差遣があつたのです。これは七箇夜です。

記録に残る最後の御神楽が、「大和行幸」の前年の文久2年（1862）でした。このときは神鏡が2面立て続けに落ちるといふ、非常事態中の非常事態が生じました。

まずこの年の1月2日、朝の大柳生庄御供という、正月の大切な御饌を奉っているときに、御鏡が1面落ちた。これは信じがたい出来事でした。というのも、御鏡の紐には「白髪糸」という生練りの絹糸が使われていて、

一掃されます（八月十八日の政変）。これが天忠組の悲劇のはじまりでした。天忠組はたった一日で逆賊になり、その後約50日間で壊滅します。その様子を綴ったのが、天忠組書記方を務めた伴林光平で、『南山踏雲録』と云います。

伴林光平は和歌の名手で、その方面の研究については山本嘉将先生の『加納諸平の研究』（昭和36年）が参考になります。

光平の時代の日本歌壇は、桂園派と柿園派が大きな流れです。桂園派の代表が香川景樹（註1）。そして柿園派は加納諸平（註2）でした。両者の違いを簡単に説明すると、桂園派は『古今集』の仮名序に書かれた「徒言歌」を推奨し、柿園派はそれを批判した。「徒言歌」とは日常の出来事を淡々と詠んでいくもので、大歌学者の香川こそ、秀逸な歌を詠みましたが、取るに足りないつまらない歌を並べるものも多く現れた。これを批判して「歌の調べ」を重視主張したのが、柿園派の加納諸平でした。諸平は当時の紀州藩主・徳川治宝が『紀伊国名所図会』を編纂するにあたって呼び寄せられ、本居宣長の養子で紀州藩国学書総裁であつた本居大平の弟子となります。諸平は素晴らしい歌人ですが、ちょうどこの時期に起こつた紀州藩のお家騒動に巻き込まれ、兄弟弟子の長沢伴雄に毒を飲まされ、一命はとりとめるものの、体を壊してしまふ。

諸平の最大の業績は、『類題鯁玉集』の出版です。これは当時の著名歌人の歌を網羅した歌集ですが、当時最も「大物」の歌人は——対立する——桂園派の領袖・香川景樹でした。諸平は香川の歌も掲載していますが、本人の了解を得ないまま、しかもあることか何首かの歌に勝手に手を加え、書き換えて載せてしまった。まあ、傍目すると良くなっているものもあるように思いますが、当然ながら香川は激怒した。

御殿では二十年も風雨にさらされるのですが、このときはちょうど式年の御造替で、御仮殿へと御遷座の時期にあつていました。御仮殿へ神様をお遷しするときには、同時に御神鏡もお遷し、当然ながら糸も新しいものに取り替えられていた。この新しく替えた生練りの糸が切れるというのは、普通にはあり得ない事態なのです。しかも3月に、もう1面、落御した。

文久2年（1862）の社務日記には、孝明天皇とのやりとりが詳細に記録されています。私はこれを全部翻刻しましたが、孝明天皇が縮み上がつて恐れられたことが「ありあり」と記されています。

このような文久2年の「神鏡落御」が、翌年の「大和行幸」における「春日社に幸」の理由だったのは明らかです。このような「大和行幸」動機の究明は未だなされていません。

【註1】 1813・1864。幕末の志士。筑後国久留米水天宮祀官。
【註2】 1637・1703。江戸前期の儒医・国学者。著作に『異称日本伝』『公事根源集釈』『習医規格』など。
【註3】 1630・1714。江戸前期の儒学者・本草学者。福岡藩士。著作に『養生訓』『慎思録』『大和本草』など。

4. 幕末の歌人、伴林光平

(1) 当時の日本歌壇

文久3年（1863）8月17日、天忠組は大和行幸の露払いと称して五條代官所に押し入つて、代官・鈴木源内の首を刎ね五條政府を立てた。その翌日の8月18日、宮中で公武一和派によるクーデターが起き、尊王攘夷派が

ただ、これには後味の悪い後日談があつて、諸平が詠んだ歌に景樹が感心し、「先回の非を償うだけの歌」と諸平の所行を許したと言われています。



伴林光平大和通いの自画讃(写)

(2) 伴林光平と大和(奈良)との関わり

さて、この加納諸平の高弟が、伴林光平です。光平は藤井寺（大坂）の出身で、もともとは浄土真宗の僧侶でした。学問が良くでき、本願寺の学寮に入る。そこで浄土教を究めるために「唯識」の研究をします。このあたりは、実のところ私にも十分には理解できていませんが、浄土の存在を「唯識立て」で考究する研究があり、そのためには仏教の根本的学問である「因明」を究めなくてはならない、のだそうです。さて、真宗僧侶の光平は、どのようにして「因明」を勉強するか。唯識と言えば、南都の興福寺と薬師寺で、大部の貴重書籍を所蔵していた。殊に、薬師寺の金堂の屋根裏には大変貴重な書類があるらしいと聞きつけたものの、これは薬師寺の僧侶しか見ることができなかつた。そこで光平は兄弟弟子の大運とともに、掃除人夫となつて毎日せつせと薬師寺境内の掃除に励み、これが僧の目にとまつて、薬師寺の金堂にも入れるようになって、大切な書物をひそかに写し取つて「因明」の学を究めたと言います。

これほど熱心に仏学を修め、ついには法隆寺の学庭で因明の講義をする

ほどの学僧となった光平ですが、いつのころから国学の研究に心がうつり、『元是神州清潔民』という漢詩を壁に書いて、とうとう寺を逐電したといひます。

光平は、まさに天才的な歌人で、万葉調でも古今調でも、あるいは新古今のようにも、変幻自在に詠みました。それを如実に表す歌集が『垣内七草』（安政6年）です。さらに言えば、光平は現代短歌の研究者も絶賛する斬新な歌も詠んでいます。その光平の歌でも、殊に秀いでたものを「光平秀歌」（柳沢文庫顧問堀井寿郎撰）として資料に添えています。その冒頭を飾るのが天忠組に関わる、次の歌です。

雲を踏み風を攀じて御熊野の果無し山の果も見しかな

やがて光平は中宮寺門跡の和歌の師匠に推挙され、ここから大和（奈良）との関係が始まります。光平は現在の藤井寺（大阪府藤井寺市）に住んでいて、伴林という苗字もその地の神社（伴林神社）から取ったとされています。中宮寺には、十三峠（現在の大阪府八尾市神立と奈良県生駒郡平群町福貴畑との境にある峠）越えて通ったのですが、同時に北の方にも足を向けた。現在の奈良県庁の北側、当時の奈良奉行所の近くに伊勢屋という公事宿がありました。その宿の離れに「神風館」という額を掲げ、そこで奈良町の有力者たちに和歌を指導した。中宮寺と中宮寺の待医を勤めた、安堵の今村文吾（松斎）の社中と南都の「神風館」で和歌を教えたわけて、その様子を示す光平の歌が遺っています。「鉄の鎖に木の刀 かせぐにおいつく貧乏なし 奈良の稽古場法隆寺 十日で祝儀が二分残る」。近松の浄瑠璃・梅川忠兵衛（近松門左衛門作『冥途の飛脚』の主人公）の「二十日余りに四十両 使い果たして二分残る」の名文句をもじって「奈良の稽古場法隆寺 十日で祝儀

が二分残る」と。

光平の歌の門人を知る資料は『垣内摘草』ですが、「神風館」の門人に限って言えば、『野山のなげき』（西村公晴著、1977、炫火草舎／神社新報社）に「神風館の人々」が整理掲載されています。これとは別に、私も20年ほどかけて伴林や門人の短冊を収集してきました。その短冊から、何人かの門人を紹介させていただきます。

まず、奈良奉行所の与力・橋本政孝。僧侶の徳明。そして金澤昇平、明治5年に奈良県最初の新聞・『日新新聞』を発行しました。石崎勝蔵、明治になっても「丁髷」を切らなかつた漢方医。森川杜園（註3）、これは有名な奈良人形師です。杜園は伴林没後、藤枝善四郎という押上（現、奈良市押上町）の酒造家の門下に入っています。橋本政宣、この人は奈良奉行所与力。望月重岑、玉泉を雅号とした有名な京の画家です。和歌短冊には雅号を入れないのが定法なので、ここでは本名・重岑の名が書かれています。

もう一人、進藤重敬。これは猿沢池の畔に住まうとは書かれています。が、「謎」の人物です。春日社の社家・富田光美と交流のあつた人物で冷泉為恭の変名との説もあります（『奈良市史』記載）。余談になりますが、この冷泉為恭という絵師は、数多の名画の模写のために武家方・公家方を往来していた。そのため過激な尊王攘夷派から幕府のスパイと間違えられて追討され、丹波市（現、天理市）にあつた内山永久寺に「心蓮」の変名で潜伏します。それでも厳しい追跡は止まず、高野山に逃げようとするのを長州藩士・太楽

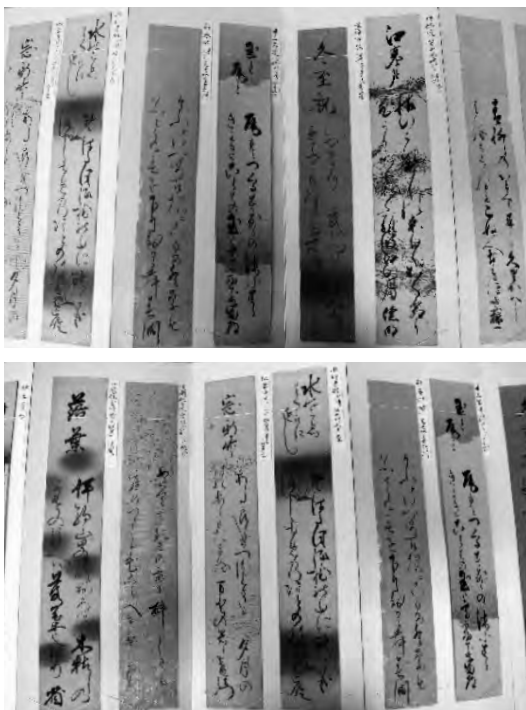


垣内摘草
（光平門下録を収載）

源太郎に鍵屋の辻（現、天理市三味田）で捕まり、首を刎ねられました。冷泉為恭は「春日権現験記」の模写もしており、大和（奈良）と関係の深い人物です。

そして、富田光美も伴林の指導を受けていました。和歌の指導を受けた詠草が残っています。これらが見落とされていた天忠組と大和に関する歴史の背景です。

本日は、「天忠組始末」をお話ししようと思っておりましたが、ほんのちよつと「始」に触れただけになってしまいましたがお許しください。あまり知られていない事件の背景について、私からの報告は終わらせていただきます。



神風館短冊帳



おかもと・あきお

1954（昭和29）年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司（2015年退職）。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『日本人よ、かくあれ』（ウェッジ）など多数。

- 【註1】 1768・1843。江戸後期の歌人。鳥取生。桂園派の祖。
- 【註2】 1806・1857。江戸時代後期の歌人・国学者。著作に『類題和歌鯨玉集』『紀伊続風土記』など。
- 【註3】 1820・1894。彫刻家。幼名は友吉、のち扶疏。杜園は号。奈良生。18才で岡野保伯に刀法を学び奈良人形を造る。明治天皇に献上した舞楽納蘇利置物・法隆寺九面観音模像等の傑作がある。また和歌を伴林光平に学び、狂言・点茶等も能くした。